

■ Articles

色彩言語 aura=soma と聖性 死生意識ノ消色

—生命論の描法試論—

和学いのち論 (3) 「いのちとことば」

まどかアッセマ庸代 ASSEMAT Michiyo

(南山大学人文学部心理人間学科)

【はじめに】ホリスティックにみる目。見えない生命を見る目。

「死」の自己意識化（気づき）や自己のいのちの本質（自分探究）を切り口に、霊性（教育）や魂とスピリチュアリティの健康（WHO健康憲章 定義の見直し 1999）と自己文化との協働課題、西（医科学）と東（自国の伝統宗教文化）の相補的医療生活を考察する。

霊性や魂への研究アプローチは、医科学においては 非科学的領域としてタブー視、又は区別して、軽視無視することで、科学と生命・宗教・文化の研究領域を別個に成立させることを研究者のマナーとしてきた。しかし、今日、生命医療の場面や介護など人の生活環境場で、先端技術とその使用者である市民レベルの医療的セルフケアが日常生活化してきた。「人の死／看取り」が、単に西洋医科学の医療技師や医師看護師などの専門家や資格取得者だけでなく、「普通の人々」「素人」も西洋医学に対してオルターナティブな(代替)医療又は相補医療として、その国々の伝統文化や自然環境に根ざした療法や健康法・修道法が見直されている。

ホリスティックな人間観に基づくオーラ・ソーマの色彩言語を、ひとつの生命論・死生観の描法として、報告を試みる。

【目的】聖性の統合

現代の聖性の意味を、オーラソーマ色彩言語で描き、語る。

1. 日本人の心身に根ざした、生命論の描法・アプローチ法を探究する。
2. そのために、現代の西洋医学を相補するオルターナティブな医療（相補医療・代替医療・ホリスティック医学医療）の一手法である「aura/soma」の色彩言語による療法のあり様を探る。

3. それにより、ホリスティックな人間観によるひとの死生観に関して、現代日本人の体験や実感・直観から描法の可能性を探る。

【材料】[試論のための素材]

- (1) Aura-Soma Equilibrium Bottle 104本 (25ml) No.0～103
- (2) 経典：摩可般若波羅蜜多心経（玄奘訳） 伝・空海写経「隅寺心経」写し
- (3) 聖書：新約・旧約（ドンボスコ社）、（日本聖書協会）
- (4) 書物：沈黙（遠藤周作著）
- (5) 聖典：コーラン
- (6) ホツマ伝（鳥居訳）
- (7) 集中できる時空間

【方法】

- (1) Meditation 沈黙 瞑想 祈り 深呼吸など、沈思し、集中力や落ち着きを待ち、座す。
- (2) Aura-Soma 方法によるBottle reading
聖典・書物とマスターボトルと伝授される香水と香油の平衡Equilibrium Bottle (EB)を歴史の時代順に並べる。
「般若心経」～「聖書」～「沈黙」
「ホツマ伝」「コーラン」に相当するボトルは何か、配置する。
聖書 仏教 現代宇宙意識のシンボルとしての、オーラソーマカラーの本性をreadingして、カルテ（資料参照）作成し、レポートを行う。

Fig. 1 聖性の秩序と統合



- (3) 同様に、各人のインスピレーションで選ぶ4本を、その本人の前に並べ、その4本（本質・過去による癒し・現在の歩み・未来のチャレンジ）とその本人と筆者自身の場でイメージとして啓れることや言葉になる思いを、言葉にする。4本のコンサルテーションの方法は、伝えられた方法や、ワークを通じたテキスト（日本語版）を手がかりとする。

注) あくまで、本人の「気づき」による「自己探求」「生命描写」である。

コンサルテーションは、教える態度でなく、その人の本質やそのときの本物のその人を知るプロセスと一緒に携わるころの姿勢である。

Fig.2 Aura-Soma Reading



Fig.3 Holistic Space としての和茶室 いのちのことば



【結果データ】

2003. 7. 28 (月) ~ 8. 2 (土) 御岳にて
 ワークショップ「いのち医の理いのり」
 (心理人間学科自己開発トレーニング2001~最終年)

A群) マスター 3 生命体のカルテ記録

オーラ・ソーマ、マスター聖性の秩序と統合 (つながり)

Equilibrium bottle	Master太子名	聖典・書物	Message	いのちのことば	色形
60 (blue/clear)	老子観音ボトル	般若心経	陰陽中庸	ホトケ〇解け	青
55 (clear/red)	キリストボトル	聖書	言葉の受肉	クロス+交わり	赤
54 (clear/clear)	セラピスベイボトル	ホツマ 沈黙	沈黙・土着	点・無形/形	透

(コンピューター) 意識の交差

(秀真伝) 上代古代日本神話

マスターボトル成分 (いのち) Aura-Soma Products Limited(2003. 3 入手)

- 60 スクワラン・水・変性アルコール・スイカズラ花エキス・ハマメリス水・塩化Na・アルニカ花エキス・オリーブ油・カミツレ油・クアイアズレン・ジョチュウギクエキス・ラベンダー液
- 55 スクワラン・水・変性アルコール・スイカズラ花エキス水・塩化Na・ウコンエキス・エクリブタ葉エキス・西洋オトギリソウエキス・ゼラニウム油・トウキンセンカエキス・ニーム花エキス・バジルエキス・ヘンナ葉エキス・赤色227
- 54 スクワラン・水・変性アルコール・スイカズラ花エキス・ハマメリス水・塩化Na・ジョチュウギクエキス・ゼラニウム液

B群) 個人60生命体のカルテ記録

尚、個人カルテ10名(ワークショップ参加者)に関して、および、現時点での60名(1999~2003)のAura-Soma コンサルテーションレコードは、貴重な各人のプロセスレコードとして資料提供頂いた。別の視点から思索を温めた上で報告させて頂く。

【結論】

西洋東洋の聖性の統合と自己統合

ほとけの時代とクロスの時代からコンピューター(自己編集)の時代へ

EB60~55~54のつながりについて、

60 老子のタオイズムは、現代西欧物理学者が瞑想し、ミクロな原子像の物理宇宙原理と仏教学のマクロな曼荼羅宇宙像との同一性を直観した。タオイズムの全的瞑想いのりの方法や陰陽の宇宙存在が、現在の西洋と東洋を人間の身体性を通して統合させていく。

(上層) 青の意識色は、海と空、この世を統制する色である。

(下層) 透明の無意識色は、光り全ての高いエネルギーで、霊位の高みをもつ。又は秘める。脳ある鷹は爪を隠す。大河は静かに流れるが、この世的にはたゆまない混乱と動乱である。このような力やポテンシャルエネルギーの高さを示す透明色である。純粹に待つ力である。東洋知は待つにより発揮される。

老子と観音ボトルは、陽を待つ。老子を支える精神は、観音であった。観音は老子を待った。

55 キリストのパッションは愛と受難といわれる苦しみである。西欧諸国及びルネッサンス以降の植民地政策・現在に至る国際化グローバル化という名の西欧社会化現象は、現代に引き継がれている。反発により、宗教制度に対す

る科学制度化・組織化が現在進行中である。キリスト性はキリストのスピリットはないか。二律背反の戦い心、自己の正当化の正義感、悪を正で破る発想。若いのちである。内なる平和を求める。

(上層) 透明の意識色は、救世の色である。エネルギー全ての色彩を反射する意識力。愛という積極的力。すべてを透すので、明るい。明らかにする。ゆえに痛みを伴う。

(下層) 赤の無意識色は、情熱というパッション。60老子観音に待たれている「陽」「太陽」色。熱い無意識は、透明な意識層を照らすので、秘められない、隠れていられない。無意識が意識化される。現代のフロイト心理学での無意識の意識化に顕れている無意識の働き方をする。地の力を強くもつ。グラウンディング。地に足をつける受肉化・土着化の力。植民地化する力に顕れた。内なる家族が外に見える。家族力。西洋知は若く、生産的破壊的である。

キリストボトルは、自身の生命を活かすのは「生」から「死」への方位である。静けさを求める。又は、必要である。動脈の血色。身体で完結する。静脈へと流れる。

54 セラピスベイは会ったことがない。聞いたことがない。見たことがない。触れたことが無い。五感の記憶に無い。六感七観での存在である。受肉しない聖性。属性にならない無色透明。鏡でもなく、存在そのものを超えている。

(上層) 透明の意識色は、三者(60~55~54)の関係において見ると、キリストである。西欧の表象で現れた。

(下層) 透明の無意識色は、三者の関係においては、観音性である。

キリスト性と観音性の統合、からだところ、生と死、動と静の統合、消化が実る力の場。

生と死が同一視される時代を支える。

沈黙により、いろは空と出会い、沈黙により互いが消える。という死生観をみる。

「色彩言語による 死の意識化」では、太子のもたらず聖性の色形・表象とその統合が、何千年語り継がれているいま、aura-somaの透明セラピスベイボトルの透明は、様々な言葉や表象を今後もたらずであろう。

見えないが見える思いを、ことばにするちからが、このものの存在力である。仏の時代精神は「解けるホトケル」ちから、キリストの時代精神は「クロス」するちから、統合力である。セラピスベイがもつ、もたらず時代精神は「セラピー」沈黙の力無の宥力である。

いずれも 理（ことば）、解（トク）をもたらす。バーバルな言語意識化と、ノンバーバルな黙する無意識の意識化の「言語」として、色彩言語の存在があるようである。

(60) (55) (54)
— — + 0

【考察】

I 色彩言語セラフィム

<aura-soma>

aura-somaは、サンスクリット語では、エネルギー光と体、精神・身体存在、見えない存在と見える存在の平衡状態をあらわす。香水液と香油液は植物性、動物性、クリスタルボトルは鉱物性をもって二層にみえるホリスティックなバランス存在をもっている。このように、見る者関わる人自身の存在のシンボルとして、その人のボディからスピリチュアルなところ生命全体でかかわりをもつ。

ハーブ液としては日常の手当てに使用され、ホリスティック医学医療では、診療室や待合室などに置かれて、光りの色彩自体のもつ空間環境・場・人の身体的心理的ヒーリングにも活用されている。イギリスでは相補的医療で紹介された。日本では代替療法として着目されているが、プラクティショナー資格および医薬品や物質だけの扱いでないこと等、本来のaura-somaの存在意味や意義の秘儀性・hidden realityや「人の存在を通しての」伝承性という精神性に対する意識的配慮が思い出されるよう、普及には留意されている。Aura-somaは人間関係同様、出会いの中で、体験して学ぶ。師を通して、自身の生命内省を通して学ぶ。和語「いのちとことば」、出会うというエピステモロジー（まどか1997）のLife fantasy例であろう。

英国のハーブ研究から、薬化学出身のVicky女史（1984）が、視力を失う60代以降目が見えなくなった状態で、調合され、生み出されたカラーボトルである。その後、M.ブースにより後継され、伝えられている。日本人で最初のteacher アマリン(青山)により、1992年、南山では、ボディワーク（グラバア）でアマリンによるreadingデモンストレーションが紹介され、いのちとことば（まどか）で生命論やspirituality trainingの教材の担い手として、南山人間関係科経由で、人間関係研究センターや南山大学関係者の目に触れ始めている。（まどか1999）

読み手によって、その存在の言葉が物語られるので、「リーディング」による存在探究の手法が生まれ、現段階では、筆者は「色彩言語療法」と称す。しかし、その際、「療法」「セラピー」の範疇やその担い手は、その読み手の存在

とそのボトルの存在との関わりから生まれることばである。「いのちとことば」を象徴する。

かつて、医者とは聖職者が担っていたといわれる。人の生死を、身心ともに癒すヒーリングの仕事であり、死を看取りあの世に安らかに安住の地を与える仕事、もしくは、その地域に住む人間教育や人生の生き方を担っていたのである。しかし、現在は、医者は、国家資格の「医師」の仕事内容とみなされ。その医師は高等教育機関制度による医学部出身の医者養成を受けたものである。そのカリキュラムは、医科学中心で、身体の医療に関わる。

医者は、人間という存在としては、資格を超えたセラピストスピリットであり、マスター（太子）スピリットでもある。

セラピーは、セラフィム天使の営みに由来する。薬師の仕事内容である。療法という手法や道具を通しての見えない聖性や宇宙性に繋がれ、開かれている。資格の「セラピスト」がいるが、心理学的言語による「セラピー」だけを言うわけではない。

<Master Bottles(No.50~64)>

マスターボトルとは、マスターの存在をシンボルaura-somaで15種ある。西欧文化で伝えられてきた聖人名で呼ばれるボトルである。命名はワークブックやコースにて出会う。

太子とは、存在の極みを得た意識存在である。聖徳太子等、尊称でもある。究極の覚りを得た存在のことを、「仏陀」「マスター」「太子」等 という。この世的には「救世主（キリスト）」との呼ばれ方もある。尚、No.54セラピスト・ベイという名は「肉体をもたないマスター意識」と解されている。この世に生を受けていない存在である。No.55 キリスト・イエスは神のことばの受肉、No.60 老子と観音ボトルと呼称されるが、老子は実在した人物、観音に関しては、観音像は仏像としてイメージがあるが、観音（悟りを観る存在）という意味では、受肉経験のあるマスター意識である。

意識に高低をいうことが許されるならば、「高い」意識、「高次元」「最高級」の意識。意識に深さがあるならば、浅はかでない「深い」意識、「深遠」の意識など、形容は色々さまざまである。

20世紀心理学のいう無意識（フロイト）、集合意識（ユング）、意識の進化（ウィルバー）、超越個トランスパーソナルの探究がある。ボトルにおいては、上層の水層を意識層、下層の油層を無意識層とみなす。

人格宗教宗派（キリスト教、仏教、イスラーム）では、そのマスターの意識を神学的教義として、学習し、実践者（そのように生きる人）となるように、生活や習慣として身に付けていく。一生の生き方死に方という、伝統文化を形成して今日に至っている。神学的探究、宗教文化研究、各サイエンスとしての探究法がある。

宗教の世界で修道や修業、行動が尊ばれるのは、教義という知識の形で、そのマスターの意識を先に学んでしまう。つまり、アタマが先になっている。地に足をつける、という行為を伴う段階が、宗教的生き方や宗教的人間の人生形成に必然不可欠のプロセスとして起こる。

「人生における死・生には起点や方向、方位がある」と考える。生命意識には「下る天人」（あの世からこの世への生命意識、死から誕生へ生きる人）と、逆方位に「上る地人」（この世からあの世への生命意識、誕生から成長へ生きる人）がaura-somaによるマスターボトルと生命の樹の位置づけ（Fig. 4）から、筆者は気づかされる。見える身体的老若は年齢、見えない霊的老若は人生の味わい方・生き方である。霊的とは、この場合、自分の纏め方、マスター意識である。健康の定義や西欧の人間観に関連して、日本的霊性（鈴木大拙）については、既に述べた。（まどか2002）

身体的生命解釈として、アタマ（言語意識・考え・知覚）が先の人と、カラダ・手足という（無意識・行い・感覚）が先の人とでは、生命の人生起点・生活の学び方が異なる。教育のされ方の方向が異なることになる。

かつて地域的宗教が学問学術・知的中心であった時代や世紀には「宗教的な人」が、知的存在であった。現代日本社会のように、科学が大学教育や学問学術の中心とされる時代や世紀には「科学的な人」が、知的と解釈され、「アタマ」が先行しやすいことになる。しかし、本来科学的手法は自然科学の実験科学に代表され、「カラダ」から始まる知（生）への営みと、筆者は解して、知的とは区別している。いずれの起点であれ、両者の交差が、現実であり、両者のバランスをとろうとする力が、生命である。

マスターの学問探究態度において宗教的、な人には、「科学」というものがマスター意識に至る「手法」の一つに過ぎない。科学は方法であって、「知的」ではないのである。マスターの学問探究態度において科学的、な人には（科学信仰者、科学＝学問と捉える人、日本社会）にとって、科学をマスターすることが究極の知的行為と捉えられる。それぞれ、研究アプローチが異なり得る。

西欧社会のキリスト教神学の自然神学と自然哲学と自然科学が、一人の研究者・探究者・求道者の中で統合されていたのであれば、「宗教的な人」と「科学的な人」は同一人物である。マスターボトルは、19世紀末から20世紀科学志向時代にあって、科学性と宗教性の統合の姿形でシンボル化されている。

II 生命論描法

生命論、死生論の描法を探る途上で、様々なプロセス重視のワークで、ホリスティックな生命観による気づきのワークに出会ってきた。（LifeFantasy 1993）そのひとつに「オーラ・ソーマ」がある。

<ホリスティックにもものを見る目。生命論パラダイム。>

～ものと語り、魂色香を聴く、聖俗静動一体の生死描法の実現化／実践～

ホリスティックとは、wholeness（全）とholiness（聖）の両義性をもつ。

ホリスティックholisticとは、ホロンholonの形容詞で、ホロン（関係子）的ものの見方である。（まどか1987 人間関係vol.5）物理数理精密科学の分析法による発展途上で、物理学自らが、「関係子論」（清水博）「システム（体系）論」（ベルタランフィ）「有機システム論」（カプラ）を呈して、分析的機械論的物の見方（要素還元主義）からリアリティ所在（真理の所在）を総合的生命論的物の見方にあると考えた。機械論から生命論への発想転換、枠組みはずしといわれる「生命論的パラダイムシフト」である。

「人間関係」における「人間」理解や認識に、この「ホリスティックな」包括的理解が要される場として、「ホリスティック医療」、「ホリスティック教育」が実践的に行われている。統合医療、統合教育、様々な模索が様々なグループ形態で普及してきた。

「教育は人間観の仕事である」。とした上で、関係存在としての人間観に立つ「人間関係研究」及び、大学教育や地域コミュニティ型（Cf.学校／病院型でない、森山1994）研究教育機関での「生死論研究」において、この「ホリスティックな」人間観に基づく教育方法や、関係的医療に、着目し、テーマに応じては、実践している。

ここでは、ホリスティック医療で出会った「相補的医療」「代替医療」もしくはヒーリング効果のもたらされやすい物質の波動性を生かしたセラピーの一端に触れた。

<人間関係研究センターと生命論の接点>

「いのち」を人間関係研究センターで1980年代からテーマにしてきた。（まどか「人間関係」Vol.17最終号参照）人間関係創刊期は、科学界は生命科学の普及期でもあった。この人間関係研究創刊期2000年代は、1980年代大阪大学と早稲田大学を皮切りに、大学界では「人間・科学」という呼称の急増期で、「人間」で総括性を齎している。

平仮名の「いのち」や「いやし」も日常語になった。「いのちとことば」（1992）開講からこの10年で世俗化し、善意に解釈すれば、大切に焦点化されるようになった。今、研究開発の視点を2000年代「『いのり』と医の理、いのちとことば」という視点に、自分の仕事の方向性を換え始めている。このことを、「人間関係」の長年の読者、人間関係研究センターに報告しておきたい。筆者は、人間関係研究センターを個人的に知っているかもしれない読者や、ここに身をもって出入する人々を、不十分ながら意識している。人間の関係は研究も学習も公的という名のもとで同時にかなり私的感情に根ざしているものである。メンタルな言語理解は、精神までの営みである。つまり、精神的言語

や思い方で人生や生き方が変わるというレベルである。現実的レベルの世界としては、自他の「自己」やその歴史を無視できないものである。現代科学的理解もその範疇である。人間関係では、コミュニケーションという英語がよく使われる。バーバル、ノンバーバル共に、言語は西欧キリスト教のメンタリティの歴史において重要である。いずれのトレーニングも更に開発されるはずである。

筆者は祈りのない学問はない、という信念で学の世界を探している。コミュニケーションの中で「沈黙」「テレパシー」のコミュニケーションを日常的にも人間の力として、着目している。体験学習においてはノンバーバルの実習に位置づける。宇宙意識、生命論においては見えないイメージ、抽象化される死の世界探究によって、もたらされる生命理解の諸テーマがある。宇宙、見えない生命体とのコミュニケーションである。西洋と東洋の宇宙論は、キリスト教神学と仏教学で、秩序付けられた。現代科学は天文学・宇宙物理学「見える星」で宇宙の秩序構成を描き、見える宇宙を顕かにする宇宙論である。一方、東洋の宇宙論は、見えない宇宙意識のシンボル（イメージ像、人間の形）として「見える仏像」で秩序立てた。

聖書 仏教 現代宇宙意識の3色についてのレポートを行った。

<現代の聖性を探るとは現代の人間観の色々な死生観を解する>

今年2003年はアメリカ・イラク戦争 ブッシュ米政権によるフセインイラク政権打倒と記しておく。日本は第2次世界大戦終戦（1945）のヒロシマ・ナガサキ原子核爆弾（近代理論物理の応用としての先端科学技術）で敗戦（やっといえる時代）し、終戦した。世界的に見れば「戦争終結」して、「平和国家」という「死なない、生きる国家」形成の戦後が始まった。科学技術の進展から、衣食住の物質面の豊かさと心というみえない精神面の豊かさが問われつづけている。

国家という家が問われる時、その精神史・精神性の名称に「宗教」宗派名が今日も使用される。キリスト教VSイスラーム、キリスト教的ヒューマニズムによる民主人格VS神格天皇。しかし、国籍を超えて、政治政策を超えて、一人一人の価値観や人間観の「色々な」種類でもある。終戦も、戦争も経験していない筆者だが、「科学」「学問」「知的構造」「大学」「研究」「学習」の世界を通しながら、日米関係が意識させられていた。

知識においては、逆輸入の東洋発想を日本人は学ぶことになるのかもしれない。戦後60年間（還暦）で、北アメリカや西欧を意識的無意識的に学んだ日本が、日本の精神史や生命論を、何らかの形で遺していくことだろう。

人間関係研究もいろいろな側面がある。人間の世界・人間観の視点が異なるからである。また、「生と死」「俗性と聖性」「天地」「下る天人・上る地人」方位の異なる様々色々な人の命全ての交差点が現在の生命世界であろう。人間関

係は、お互いが人間をどう見るかが常に問われる交差点に立っている。

筆者は生命ステージを、女性論のライフステージ（人生、生活場面）と関連づけて「生産看死」とした（1986）。生に始まり死に終わる時系列である。

しかし、その人固有の誕生場面があるように、「生命のはじまりの起点方位」には上中下（東西南北）いろいろある。死の気づき、存在論的自己生命、（在る自分に出会う）という悟りでは、恐らく「死から始まる生へのプロセス」「生から始まるプロセス」としての地球生命経験があるようだ。これについては、「生命の方位」として別に考察したい。

「人間関係」「人間生命」の研究方法の模索と現代日本社会との脈絡がつくには、科学性と宗教性の接点理解が必要である。

「神秘家は 道の根を理解しても その枝を理解せず、
科学者は 枝を理解しても 根は理解していない。
科学に神秘思想はいらないし、
神秘思想に科学はいらない。
だが、人間には両方とも必要なのだ。」

当時量子理論物理学からの著書 タオ自然学（F.カプラ1978 吉福、島田訳）
工作舎より

この小論は、「個も生き全体も生きる」、そんな場づくりが、人間関係研究センターで模索されている、ということ、ここに再確認する。

<生命論描法 芸術性～科学性～トランス学問枠>

学問研究はクリエイティブなもの、もしくは創造・再創造である。人の創造性を助けるのは、相対的真理探究態度であろう。ものの存在や運動が、真理探究の絶対性から相対性へのシフトの気づきである。生命進化上に意識や学問の進化も伴う。

現代科学の潮流では、理論物理学からの「相対性」理論や、生命物質DNA構造の「相補性」、理論生物学からの「システム」論、更に、戦後のニューサイエンスの東洋西洋の思潮の交わりから、「フuzzy理論」「あいまい性」「不確定性」「ゆらぎ」等の発想は、「枠組みはずし」の勇気をもたらす。発想転換や「シフト」をもたらす。その揺らぎは、流動性（ながれ）である。物理の粒子性よりも波動性のものの見方は、流動的である。液態の表象のみかたである。粒子性のものの見方は固状態を（に）見るのはよく、固定した一個人、個人主義や機械論的人間社会構造には有効であった。流動性は、アーティストや芸術の精神性であり、科学性と芸術性が協働した生命探究の時代をもたらす。物理原理・生命原理・人間原理のつながりを見つめる目は、アート、アーティスト

の関わりももたらす。

学問（的態度）と科学（的方法）の開発、そこからいえる生命論、知的人間理解は、層フェーズが異なる。「いのちとことば」は新たな学問枠への「ゆらぎ」の取り組みの時代意識や思潮と「共時」していた（ユング）のであろうか。「それでも生きる」という不条理の生命論（まどか1999）は、相手や何者かとのみえない信・知のかかわりの場で成り立つようである。Aura-soma 色彩言語は、液状の香水香油二層の交わりに個人個人がかかわりつつ、現代意識の潮流の中で、創造され表出された。

この「色彩言語」研究の一部は2003年度南山大学パツフェ研究奨励金 I - A（特定研究）助成による。

意識の成長・進化の方法論

目的レベル	それぞれのレベルの理論・セラピー手法		
成熟した自我	交流分析 リアリティ・セラピー 精神分析 サイコドラマ 自我心理学 フロイト心理学	ゲシュタルト・セラピー ロゴ・セラピー（フランクル）	サイコシンセシス（アサジオリ） ホロロビック・プレスワーク（グロフ） 各種瞑想法（折り）
ケンタウロス	バイオエナジェティックス アレキサンダーメソッド ロジャーズ派セラピー 実存分析 ロルフィング ハタ・ヨーガ 気功法（静功、太極拳）	実存心理学 人間性心理学	奉仕
（トランス・パーソナルな帯域） アトマン	各種宗教的修行法 （禅、クンドリニ・ヨーガなど） ヴェーダーンタ 大乘仏教／金剛乗仏教 道教 秘教的イスラム教 秘教的キリスト教 秘教的ユダヤ教 クリシュナムルティ		トランス・パーソナル心理学 ユング心理学

天外伺郎（SONY役員 CD、エンターテインメントロボットAibo開発者）

「イーグルに訊け」2003 飛鳥新社より

ウェルバーの表捕捉

【参考文献】

<オーラソーマ関連>

木村孝2001 和の彩りにみる色の名の物語 淡交社

Mike Booth (著) 黒田理恵子 (訳) 2002 Naming of the Bottles モデラート

Mike Booth, 野田幸子 (著) 1999 AURA-SOMA HAND BOOK モデラート

International Academy Of Colour therapeutics (制作・出版) オーラ・ソーマ ワークブック 日本語版三巻 ファウンデーションコース, インターメディアットコース, アドバンスコース

Irene Dalichow, Mike Boohe (著) Aura-Soma Healing Through Colour, Plant, and Crystal Energy大野百合子 (訳) 1996 オーラソーマヒーリング VOICE

<聖性の書物関連>

遠藤周作 1966 「沈黙」 新潮社

伝・空海「隅寺心経」根津美術館蔵、清水公照・山田恵諦 他 1995 「般若心経」プレジデント社

Muhammad Taqi-ud-Din Al-Hilali, Muhammad Muhsin Khan (編) THE NOBLE QURAN DARUSSALAM

日本聖書協会 (発行) 聖書

西村貞 1978 「キリシタンと茶道」 全国書房

Soshitsu Sen (著) 1979 CHADO The Japanese Way of Tea Weatherhill, Tankosha

トマス・ア・ケンピス (著) 呉茂一・永野藤夫 (訳) 「イミタチオ・クリスティ キリストにならいて」 講談社

鳥居礼 1978 「完訳 秀真伝」 上・下巻 八幡書店

安藤千雪 (著) 2001 世界の言語は元ひとつ 今日の話題社

<ホリスティック関連>

C+Fコミュニケーションズ (編・著) 1986 パラダイム・ブック [新版] 日本実業出版社

F・カプラ (著) 吉福伸逸・田中三彦・島田裕巳・中山直子 (訳) 1979 タオ自然学 現代物理学の先端から「東洋の世紀」がはじまる 工作舎

G・Hボードレイ (著) 後藤平・三嶋唯義 (訳) テイヤール・ド・シャルダン 信仰と科学 創造社

医の統合を語る会 (編) 竹内正・阿部正和・東健彦 (編集代表) 1988 医の統合Ⅱ 医学と現代生物学 日本医事新報社

石川光男（著） 1994 西と東の生命観－21世紀を創る文化の視点－ 三信図
書

石川光男・高橋史朗（編） 1997 現代のエスプリ ホリスティック医学と教
育 ーいのちを包括的に観るー 至文堂

日本ホリスティック医学協会（編） 1990 生命のダイナミクスーホリスティッ
ク・パラダイム 柏樹社

日本ホリスティック教育協会 中川吉晴・金田卓也（編） 2003 ホリスティッ
ク教育ガイドブック せせらぎ出版

『日本の美学』編集委員会（編） 1999 日本の美学29 死 再生への序 ぺ
りかん社

<CD>

宮下富実夫 1989 誕生 BIWA RECORDS



Fig.4 Tree of Life by aura-soma 死生の起点方位 (Madoca2003)

Aura-Soma C&C Connection Holistic Society by Amalin 青山ひづる